**『宗教研究』九二巻別冊要旨・入力ファイル**

**左の枠にある四項目を入力してください。**

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| TSURUOKA Yoshio | **発表者名のローマ字表記**　　例：鈴木花子→SUZUKI Hanako　　半角で入力 | Transformation of body and mind in Christianity | **欧文タイトル**　　邦文題目に副題がない場合、サブタイトルを付けることは不可半角で入力 | 鶴岡　賀雄 | **発表者名** | キリスト教における身心変容と霊的暴力 | **発表題目**　　理事会承認後の題目変更は認められません。プログラムと同一にしてください。 |

**２頁目に、要旨（四〇字×四〇行以内）を入力し、九月一四日までに送信してください。**

提出原稿の書式をお守りください。

**・メールの件名と添付ファイルの名前**

別冊要旨　発表者名

例：別冊要旨　鈴木花子

**・送信先**　『宗教研究』編集委員会

ja-religion@mub.biglobe.ne.jp

十字架のヨハネの神秘思想は「魂の暗夜」と称される霊的状態の記述と理論化を特徴の一つとする。これは、神との合一をめざす魂（人間）が陥る、「負の感情」の横溢状況とも解しうる。そこに語られるのはまず、自身の霊的向上の途が決定的に絶たれたと感ずる絶望感で、あらゆる自己肯定が不可能となる。周囲からの評価も地に落ち、嗚咽すら発し得ない深い抑鬱に沈み込む。暴力的情念の激発も伴う。さらに彼は、この無定形の苦しみにひとつのかたちを与える。無力無能な自分は神に嫌われ、呪われているとの信じ込み、神が自分に「襲いかかり」、（霊的）暴力を振るわれているとさえ感じる。この堕地獄者の自覚は暗夜の最暗黒の地点と見える。が、同時にそこに、この窮境から脱する際の方向性を読みうるかもしれない。光の天使が神あるいはアダムへの「妬み」のゆえに転落したとする「悪の起源」の神話－－天使転落の神話は、「神秘」としか言えない悪の起源の問題をなんらか了解可能たらしめる－－を、この暗夜の意義解釈の参照項とすることができようからである（後述）。

十字架のヨハネは、この負の感情からの脱出の方途を具体的に説くことはない。あらゆる能動的努力ができなくなる状態こそ魂の暗夜だからである。ただ「恩寵によって」、通常何年にも及び幾度も襲い来る暗夜も、いつか終わる、と記すだけである（しかしこの言葉自体が暗夜の直中にある人には届かない、とも言う）。そこに敢えて負の感情処理のワザを見るとすれば、暗夜というべき身心状態がどのようにあるかをリアルに描き、それを合一への道行きの中に位置づけ、苦しみの先にある境地を語っていること自体ということになろう。だが、その際彼は、「夜」が明けて明るい光の中に立つ、といった語り方をしない。じつに彼の神秘思想では夜は明けない。神との合一という究極目的、愛の成就は、夜の中で、「夜なれど＝夜なればこそ」なされる。同じ夜が「曙より愛しい」夜に変わり、夜こそが「恋人同士を結ぶ」のだと彼は歌う。夜の暗さが、愛を妨げる一切から解放するものへと、自作の神秘的恋愛詩の言葉のワザの中で位相を変じていく。この変質の意味を、堕天使の神話物語を遠く参照して解釈してみたい。

　天使の妬みが悪を将来したとして、その妬みはすでに悪だろうか。しかし聖書の神も「妬む神」だった。いったい妬みとは何か。妬む主体は優れて人格である。聖書の神の「妬み」は「熱情」とも訳される。それは愛の熱情である。約言すれば、妬みは愛（善美なるものへの欲望）を前提とする。愛する者のみが妬みうる。妬みは愛の変質態である。だからだろうか、十字架のヨハネの歌う「夜」には、愛を妬みに変質させる要件たる第三者が現れない（「そこには他に誰もいない」）ことが強調される。愛し合うふたり以外の一切を「忘却」した「麗しい夜」の中でこそ愛の交歓は成る。精神分析の言葉を援用すれば、第三者の審級が介入し現実原則が支配する「この世」への誕生＝転落以前の、母子関係的二項関係への引籠りとも見える。が、愛という根源的欲望を、「妬み」の歪みを免れたかたちでこの世に実現するには、歪む以前の純粋状態（それは愛の完成状態の予感でもある）への回帰の回路がまず確保されていなければならず、そうしてこそ、妬みとなり得ない「熱情」的愛のこの世の地平―彼が生きた近世初期スペインの現実は、迫害や殺戮という宗教的暴力で世界史上に知られているだろう―での実現も辛うじて期待されうる、とするようである。以上、善美なるものを巡る抗争としての暴力が不可避のこの世で愛の業が可能になるには、この世の一切から撤退した引籠りの地平が必須だとする主張がキリスト教修道思想の一面に見て取れる、とするのが本発表のテーゼである。